



# マカオが熱い 4つの理由



**港珠澳大橋**  
 ・2018年10月24日開通  
 ・マカオ、珠海（中国）、香港の3都市を結ぶ世界最長の海上橋  
 ・香港国際空港から珠海市内までの総延長は55km（そのうち香港国際空港／マカオ間は42km。36kmは海上橋と6.7kmの海底トンネルで構成）  
 ・片側3車線、自動車専用道路、制限速度は時速100km  
 ・2009年着工。総工費約1000億円（1兆6000億円）

2019年はマカオ特別行政区の発足から20周年を迎える。この20年間で社会的な安定と優れたインフラを手にしたマカオは、成熟したデスティネーションに大変貌を遂げた。交通網や滞在施設の拡充と食やエンターテインメントの魅力向上は競争力を高め、2019年はブームの到来を予感させる。その理由を知れば、旅行商品に幅と奥行きを持たせ海外旅行販売に弾みがつく。

待望の全面開通となった港珠澳大橋



## 港珠澳大橋の供用開始

### アクセス利便が大幅向上

1 年間にマカオを訪れる日本人旅行者約33万人のうち、75%は香港国際空港から市内から海路・フェリーを利用している。このほか陸路の利用者は約10%。また日本から空路・直往便を利用する旅行者は全体の15%。つまりアクセスの主流は海路・フェリーというのが現状だ。これに比べて所要時間を大幅に短縮できる、別のアクセスを可能にしたのが2018年10月に供用を開始した港珠澳大橋だ。

港珠澳大橋は香港・マカオ・珠海を結ぶ高速自動車専用道路の総称で、香

港空港からマカオまでは42km。マカオ側の海上橋約23km、中間部の海底トンネル約7km、トンネルを出たところから香港空港までの約12kmで構成される。香港空港の近くに利用者のためのイミグレーション施設が設置され、マカオ側にも同様の施設が新設された。

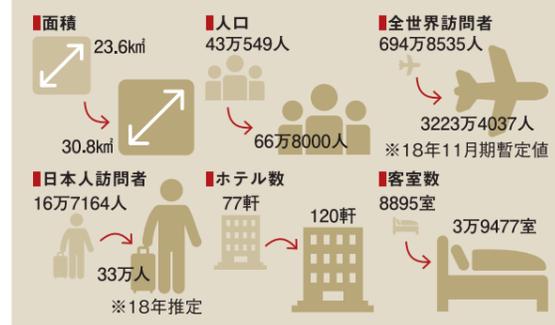
### 所要時間は半分以下

仮に時速80kmで走行すれば、香港側のイミグレーションから40分程度でたどり着ける。香港空港の到着ロビーを

出発し、マカオのイミグレーションを出るまでの出入国手続きを含めても90～100分程度。これまではフェリーを利用する場合、香港空港に到着してから乗り場への移動や待ち時間を含めて合計4時間以上かかっていた。つまり港珠澳大橋を利用することで、所要時間を半分以下に短縮できる。供用を開始したばかりで現在はまだ香港空港から橋に向かう導線上の案内表示等が未整備な面はあるが、しっかり情報収集をして利用すれば極めて便利なルートとなる。

もっとも、フェリーの良さはなくならない。たとえば、香港の空港で出入国手続きを省くことができ、手荷物も日本からマカオまでスルーチェックインで運べる利便性があるほか、チャーターすれば一度に大型団体を移動できるのも海路ならではのメリットだ。

## 20年間の成長の軌跡



マカオ（左下）を基点に中国と香港を結ぶ新観光ルートを開発する環境が整った。有望な観光素材の一つがマカオと並びユネスコ食文化創造都市に認定された順徳（上）で料理（右下）は切り口の1つになる



## グレーター・ベイ・エリア

### マカオを基点に新たな観光ルート誕生

港 珠澳大橋の供用開始は珠海へのアクセスを多様化し、マカオ・香港・中国本土を組み合わせた商品造成が容易になる。これまでは香港とマカオ、香港と深圳の組み合わせにとどまっていたが、今後はマカオを基点にさまざまな組み合わせが可能となる。ルートもマカオ発着はもちろん、香港や広州を利用した多様なパターンが考えられる。マカオの北に接する広東省を含むグレーター・ベイ・エリアを視野に入れた商品の多様化が実現できるわけだ。

グレーター・ベイ・エリアは観光開発の可能性に富んだエリアで見どころも豊富だ。たとえば、珠江デルタの西南に位置しマカオから車で1～1.5時間の開平市は、塘口鎮、百合鎮といった村落群が世界遺産に登録されており、歴史市街地区が同じ世界遺産であるマカオと共通項で括れる。仏山市順徳区

もマカオから1時間程度。マカオと同様にユネスコの食文化創造都市に登録されており、こちらも親和性が高い。

珠海はマカオに隣接し地理的な親和性が高いだけでなく、物価が安く、エンターテインメントやホテルが充実しているのが魅力だ。珠海と広州の間に位置する中山市は、日本との関係も深い革命家、孫文の生誕地であり、孫中山故居記念館などの見どころがある。

### 旅行会社の本領発揮を

マカオから広州へとつながるこれらの観光素材をつなぐ新ルートは、FITには難易度が高い。むしろプロが企画・手配・案内をするパッケージツアーに向いており、旅行会社が本領を発揮しやすい観光ルートとなり得るものだ。

また、グレーター・ベイ・エリアを

商品企画の視野に入れることで、発想の転換を図ることもできる。マカオや香港といったショートホールのデスティネーションは3泊程度の観光という既成概念があるが、マカオを基点に広東省に足を延ばすことによって4泊・5泊に幅を広げられる、いわばミドルホール・デスティネーションに変化したと捉えることができる。広東省の主要観光地はいずれもマカオからの日帰りも可能。マカオの充実した施設はその基点となる実力を兼ね備えている。

マカオへの旅行市場を拡大する効果にも期待できる。現在は、世界遺産を軸に学び体験を望む知的欲求の高いシニア層と、IR（統合型リゾート）をはじめとするエンターテインメントへの関心が強い若年層に二極化している。しかし、グレーター・ベイ・エリアの都市を組み合わせることで、学びとエンターテインメントの両方の要素を満たす旅行商品の造成が可能になる。また、シニア層にとっては、マカオの世界遺産だけでは物足りない場合でも、グレーター・ベイ・エリアを加えれば十分な学びの要素を提供することができる。



## 2つのユネスコ認定

### 国連が認めた希少性と独自性

マカオはユネスコの世界文化遺産と食文化創造都市の2つの登録を受けている世界でも稀有なデスティネーションだ。マカオは2005年、東西文化が融合してきた歴史的な重要性が認められ、世界文化遺産に認定。マカオ半島の中心にある22の歴史的建築物と8カ所の広場を含む日常生活地域が「マカオ歴史市街地区」として登録されている。

もう一つの食文化創造都市（シティ・オブ・ガストロノミー）は、ユネスコが2004年に立ち上げたプロジェクトで、文学、映画、音楽、工芸、デザイン、メディアアート、食文化の7分野でそれぞれに特色のある都市を認定する。グローバル化に伴い世界が均質化するなかで、それぞれの都市の独自性と文化の多様性を保護するのがユネスコの狙いだ。食文化創造都市に認定されているのは世界

で26都市のみ。マカオは2017年10月に認定を受けたが、中国国内でも食の中心といわれる広東省・順徳と四川省・成都に次いで3都市目。人口わずか66万人ほどのマカオが認定都市に入っていることは、食文化がいかにユニークで魅力的かを証明するものでもある。

### 食の背景に視点を広げる

また、マカオは食文化創造都市への認定をきっかけに、4年計画で食文化都市としての魅力に磨きをかけている。2018年を「マカオ美食年」に定め、食に関する数多くの取り組みに着手。グルメ情報の発信強化、料理を中心とする旅行ルートやウォーキングルートの作成、ガストロノミーをテーマにした交流プログラム、マカオにおける食文化の多

様性の維持・保護のための住民に対する啓蒙活動などを展開していく

食文化創造都市のコンセプトは、新たな旅行需要の創造にもつながる。旅行において食の要素が重要なことは言わずもなだが、食の魅力を活かした旅行商品は、著名レストランでの食事や、美食体験を組み込むことが主眼となっている。しかし食は本来、地域の風土や文化、習慣、歴史などと密接に関連しており、食の背景にまで踏み込んだ切り口を旅行企画に盛り込めば、新たなガストロノミー旅行という分野を開拓し差別化を図ることができる。その舞台としてマカオは最適な場所だ。

たとえば、マカオ料理の代表格であるアフリカン・チキンは、大航海時代にマカオの船乗りがアフリカで鶏肉のグリル料理に出会い、インドやマレーシアで入手したスパイスやココナッツミルクをソースの素材に加え、独自の料理として完成したもの。その歴史と背景を物語る要素と実際の料理の味わいを組み合わせれば、ユニークで魅力的な商品を作り上げることが可能だ。



## 相対する観光要素

### 異なる魅力で商品に味付け

“One Place, Two Destinations”はマカオの魅力をも的確に説明する言葉だ。2つの相対する観光要素を1つのデスティネーションで楽しめるのが特徴で、1回の旅行で2回分楽しめる。

しかも2つの相対する観光要素がいくつもある。第1に東洋と西洋。マカオは東洋を象徴する中国文化と西洋を象徴するポルトガル文化が出会い、相互に影響しつつ融合しマカオ文化を形成している。17世紀のポルトガル文化を今に伝える聖ポール天主堂跡や大堂（カテドラル）、ギア教会、ペンニャ教会がある一方で、媽閣廟や観音堂、関帝廟をはじめ、仏教、道教、民間信仰の寺院が数多く存在する。料理も広東料理からポルトガル料理や本格フレンチまで東西の味わいを楽しめる。

第2に中世と現代。東洋や西洋の歴史を反映した遺跡、建築物などが中世

の東西文化を今に伝えているのに対し、マカオには現代的な観光素材も少ない。高さ338mのマカオタワーは現代マカオの象徴的な建築物で、展望台からはマカオや珠江デルタの経済発展を視野に収めることができる。

### 日本のお手本に

第3に世界文化遺産とIR。世界文化遺産の歴史市街地区がマカオの歴史と文化の魅力を象徴する存在なら、IRは最先端のシティ・リゾートを象徴する存在。IRは日本でも観光誘致の原動力として期待され、法制化により導入が決まったばかり。マカオのIRは将来の日本のお手本としても注目されている。

カジノやエンターテインメント施設、宿泊施設、コンベンション施設などを含むIRは、レジャー需要からMICE需

要まで幅広く取り込める未来型の観光誘致を象徴する存在だ。しかもマカオではIRとして6つの営業権を得たコンセッションが競合することで、パリエーション豊かな提案を行っており、多様な滞在施設やアジア最高峰のエンターテインメントを実現している。

イベントが充実していることもマカオの特徴だ。年間を通じて数多くのイベントが開催されており、中国の伝統的な祝祭である春節や端午節（ドラゴンボートレース）、西洋の祝祭であるイースター、聖ヨハネ祭、クリスマスなどは観光客も大いに楽しめるイベントだ。さらにマカオ芸術祭、国際花火コンテスト、マカオ・グランプリ、マカオ・フード・フェスティバルなど、盛りだくさんのイベントが開催される。

マカオ政府観光局は旅行会社との強力なパートナーシップの下、日本の旅行市場にアプローチしていく方針を掲げている。大手に限らず、中小や地域に根ざした旅行会社も含め、緊密な関係を築きたい意向で、特に香港線の就航地域における地方市場の掘り起こしと活性化に注力する方針だ。

## 主要イベント

東西にルーツを持つ独自の祝祭文化を誇るマカオはイベントの種類も豊富。いつ訪れても人々を飽きさせない。



2月 春節祝賀行事



6月 マカオ国際ドラゴンボートレース



9月 マカオ国際花火コンテスト



12月 マカオ・ライト・フェスティバル



マカオ政府観光局

〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-16-9 永田町ガラスゲート 7 階  
Tel : 03-5275-2537 / Fax : 03-5275-2535 E-mail : mgto@milepost.co.jp  
www.macaotourism.gov.mo www.facebook.com/macaotourism.jp/ twitter.com/macaotourism\_jp  
www.instagram.com/macao\_japan/